

## 箱庭療法に関する基礎的研究（その2）

——知的優秀児の箱庭表現をめぐって——

岩 堂 美 智 子 ・ 木 村 晴 子

### A Fundamental Study on the Sand Play Technique (2)

— Some Expressions by gifted children in Sand Play —

BY MICHIKO IWADÔ AND HARUKO KIMURA

#### 序 文

Lowenfeld<sup>9)</sup> が考案し、Kalf<sup>4)</sup> により開発された箱庭療法 (Sand Play Technique) は、河合<sup>6) 7)</sup> の紹介により近年我が国においても、子どものみならず広く成人にも通用する心理療法の一技法として発展しつつある。

この技法を用いてセラピーを実施する一方、われわれはさまざまな被験者の箱庭表現に接し、その諸相の分析を試みている。

既に本紀要において報告したとおり、一昨年われわれは、小学校児童群の箱庭表現を分析し、その特徴、一般的傾向をあきらかにした。また問題群として精神薄弱児をとりあげ、普通児の箱庭表現と彼らのものを比較し、箱庭と知的能力との関連を考察した。

本研究は前報にひきつづき、Sand Play の実際のための基礎的研究として、主として知的優秀児の「箱庭」を中心に、いくつかの角度から箱庭表現の分析を試みたものである。

いわゆる「優秀児」と呼ばれる子どもたちはいったいどのような箱庭を作るのか。日頃問題児の箱庭に接して、その表現の意味を考えているわれわれは、一方でその疑問を抱いていた。

セラピーをうけているクライアントの箱庭作品と優秀児のそれとは共通性があるのか。彼らの作品は生き生きとその健康性が発揮されて、セラピーの一つの指標となりうるであろうか。

箱庭表現にみられる種々の問題を検討し、さらに箱庭療法の治療的意義を追求する上に、問題児のみでなく優秀児の箱庭表現をも知り、その諸相に検討を加えておくことは、一つの重要な課題であろうとわれわれは考える。本研究はその手がかりとなるものである。

しかし、「優秀児<sup>9) 10)</sup>」といってもその基準は実に多様であり、定義づけは困難である。そこでわれわれはまず、知的優秀児すなわち知能テストの成績のきわめて

優秀な子ども（高IQ児）を被験者として選ぶこととした。

なお、本研究においてわれわれは、同時にこれまで収集した資料をもとに、箱庭作品を評定するカテゴリーの作成を試みた。

これは、作品から制作者の感情、主体性をとらえ、みる者がどのように作品に共感し、かかわっていけるかということに焦点をおいて作成したカテゴリーである。個々の作品の評定を試みることによって今後さらに改案していきたく思っている。

#### 目 的

優秀児といわれる子どもたちのうち、知的優秀児（高IQ児）の箱庭表現の特徴を把握し、普通学級児、精神薄弱児、および成人の箱庭と比較、考察する。さらに治療をうけているクライアントの作る箱庭と比較し、セラピーにより次第に主体性の芽生えてきたクライアントの作っていく箱庭の流れに比べて、どのあたりが似ているか、あるいは一致するか、などを分析することにより、箱庭療法の治療的意義を追求する。

#### 手続きおよび方法

##### (1) 被 験 者

高IQ児は大阪市内の小学校10校余から、過去2ヶ年以内に施行された知能テストの成績がきわめて優秀な児童（学業成績も良好）を選び、無作為抽出を試みた。また普通学級児、精薄弱児については、昭和44年におけるわれわれの資料によった。

##### (2) 用具・材料\*

##### (3) 実施方法

(i) 施行場所 大阪市立大学児童心理学研究室またはプレイルーム。

\* 岩堂他、1970 文献 (2) 参照

第1表 被 験 者

群	総数	男	女	備 考
高 I Q 児	35	24	11	I Q 135以上の児童、小学校4・5・6年生
普通学級児	80	43	37	小学校4年生
精神薄弱児	28	19	9	養護学校・特別学級児童4・5・6年生
成人	40	20	20	21～25歳の大学生

(ii) テスター われわれのうち、いずれかが立ち会う。  
(iii) 教示 「ここにある、砂箱と玩具を使って、あなたの好きなものを作って下さい。玩具はどれを使ってもよい。時間は自由ですから、できあがったら知らせて下さい。」

(iv) 記録 被験者が制作に要した時間、使用した玩具の数および種類、最初に使用した玩具、砂を掘り下げる度合、制作態度、印象などを、テスターが測定または観察して記録する。さらに制作後、被験者に、作品のテーマまたは説明、感想、足らなかった玩具などを問い、記録しておく。できあがった作品はカラースライドにする。

(v) 実施日時 昭和45年5月25日～11月13日

#### (4) そ の 他

被験者には同時にバウムテスト<sup>8)</sup>を施行して参考資料とする。

#### (5) 整理の方法

(i) 箱庭制作に関して、各群の数量的比較をおこなう。

(ii) 作品をテーマ別に分類し、高IQ児群と他群とを

比較、検討する。

(iii) 箱庭作品およびその制作態度を評定するカテゴリーを作成し、各群の評定を試みる。

(iv) 高IQ児の箱庭について、バウムテストの結果との関連を検討する。

### 結果および考察

#### I. 測定による数量的比較

各群の箱庭制作における測定値の平均、および各群間のt-検定の結果は第2表、第3表のとおりである。

第2表 (平均値)

群	項目	人数	制作時間	使用玩具数	種類
高 I Q 児		35	33'36"	63.43	4.34
普通学級児		80	18'13"	49.79	3.98
精 薄 児		28	23'18"	74.96	4.82
成人		40	21'56"	48.00	3.82
高 I Q 男 児		24	35'31"	67.29	4.33
高 I Q 女 児		11	29'26"	55.00	4.36
成人 男 子		20	25'39"	47.55	4.05
成人 女 子		20	18'14"	48.45	3.60

高IQ児群は他群のいずれよりも制作に長い時間をかけており、これはいずれの群とも有意な差が認められた。また、使用玩具の数も普通学級児群、成人群に比しかなり大きな値を示しているが、精薄児群はなおこれを上まわっている。精薄児群のこの数値は、彼らが玩具を羅列することに興味をもった結果とみられるが、高IQ

第3表 (t-検定)

制 作 時 間	使 用 玩 具 数	種 類
高 I Q 児 > 普通学級児 * *	高 I Q 児 > 普通学級児 *	高 I Q 児 > 普通学級児
高 I Q 児 > 精 薄 児 *	高 I Q 児 < 精 薄 児	高 I Q 児 < 精 薄 児
高 I Q 児 > 成人 * *	高 I Q 児 > 成人 *	高 I Q 児 > 成人
高 I Q 男 児 > 高 I Q 女 児	高 I Q 男 児 > 高 I Q 女 児	高 I Q 男 児 < 高 I Q 女 児
成人 男 子 > 成人 女 子 *	成人 男 子 < 成人 女 子	成人 男 子 > 成人 女 子

\* は危険率5%、 \*\* は1%で有意

第4表 玩具の種類

種類	群	高IQ児	普通学級児	精薄児	成人	高IQ男児	高IQ女児	成人男子	成人女子
人間		5.83 (9.2%)	6.01 (12.1%)	13.96 (18.6%)	2.63 (5.5%)	3.71 (5.5%)	10.45 (19.0%)	2.75 (5.8%)	2.50 (5.2%)
動物		12.74 (20.1%)	14.73 (29.6%)	16.57 (22.1%)	8.00 (16.7%)	15.16 (22.6%)	7.45 (13.6%)	9.75 (20.5%)	6.25 (12.9%)
植物		18.14 (28.6%)	9.88 (19.8%)	9.64 (12.9%)	22.28 (46.4%)	19.45 (28.9%)	15.27 (27.8%)	19.55 (41.1%)	25.00 (51.6%)
家、家具その他		23.57 (37.1%)	15.69 (31.3%)	22.78 (30.4%)	14.03 (29.2%)	25.25 (37.5%)	19.90 (36.2%)	14.00 (29.4%)	14.05 (29.0%)
乗り物		3.14 (5.0%)	3.61 (7.2%)	12.00 (16.0%)	1.05 (2.2%)	3.70 (5.5%)	1.90 (3.4%)	1.50 (3.2%)	0.60 (1.3%)

児の作品では、使用された玩具のすべてが十分意味をもっており、豊かな内容の反映であろうと思われる。高IQ児のうち特に男子は比較的個人差が大きく、短時間であっさり制作した者、100分以上時間をかけて熱中し、じっくり緻密な作品を作りあげた者などさまざまであった。

さて、種類に関しては、被験者が使用した玩具を、人間類、動物類、植物類、家およびその他の建造物、乗り物類の5種類に分けてみた。子どもは一般に多くの種類の玩具を使う傾向があるが、これは玩具そのものに対する興味が大きいためであろう。その極端な例が精薄児の無統制で過剰な玩具選択にみられるものである。高IQ児群は普通学級児群より多く使っているが、その差は大きくない。子どもの場合、独創的で豊かな作品を作った者が種類を多く使っているようである。

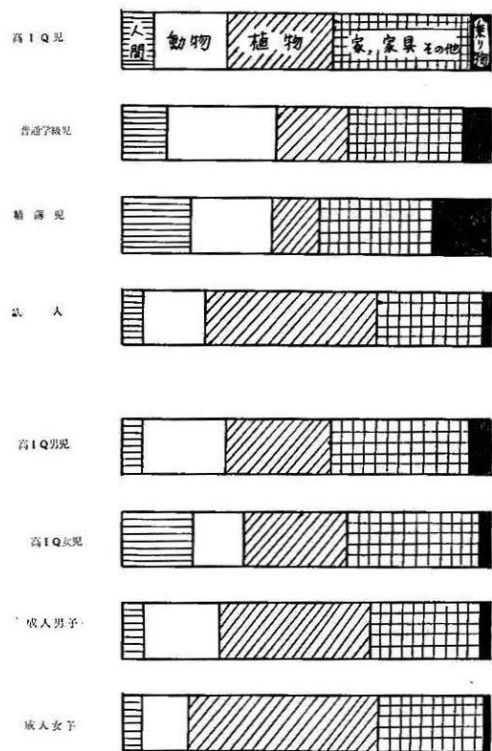
他方、成人の場合は、玩具のサイズや種類を気にするものが多く、同系統の玩具で箱全体をひとつにまとめあげる者がほとんどであった。中には石と植物のみで「庭園」を制作した者もあり、おのずと玩具の種類が少なくなっている。

第4表は各群が使用した5種類の玩具の各々の平均値である。そのパーセンテージをグラフにすると、第1図のようになる。

一般に、人間類、動物類、乗り物類に関しては、高IQ児は他の子ども群より使用した割合は少ないが、成人群に比べるとやや多く、ちょうど成人と子どもの中間に位置している。植物類は成人群が圧倒的に多く、特に成人女子は50%以上である。高IQ児群も他の子どもに比し、植物を使う割合は多いようである。

次に、最初に使用した玩具は何かということを各群について調べてみた。

われわれの被験者には、まず最初に植物から置いていく者および家や建造物から置く者が総じて多かった。幼児に植物の玩具を使う者が少ないことを考える時、これ



第1図

第5表 最初に使用した玩具

群	順位	第1位	第2位	
高IQ児	35	植物(19)	家、建造物(14)	その他(2)
普通学級児	80	家、建造物(41)	植物(18)	その他(21)
精薄児	28	家、建造物(12)	人間(5)	その他(11)
成人	40	植物(24)	家、建造物(13)	その他(3)

( ) 内は人数



らの被験者は、箱庭と自分との間に心理的距離をおいているともうけとれるし、あるいはかなり統合できる段階の人とみることもできるのではないか。気にいった玩具に夢中になってとびつく精薄児群には、人間類や動物類を最初に使う者が多かった。箱庭は植物類を適当に配置すれば見た目に美しく仕上がる。成人群には植物類を装飾的に使用した者も多いようであった。

## Ⅱ. テーマの検討

各群の作品を第6表のようなテーマ別に分類してみた。aは比較的小さなスペースのテーマ、b、cは広大なテーマである。

表より明らかなように、高IQ児のテーマは広大なものが多い。成人群は半数近くが、また普通学級児群は約3分の1が、テーマaに属している。広い範囲のテーマを選ぶのは高IQ児の特性の一つであると思われる。

また、普通学級児群では男子の27.9%が「戦い」のテーマの作品を作ったのに対し、高IQ児には同じテーマは1名のみであった。これは前者がすべて小学4年児童であるのに、高IQ児は小学4・5・6年にわたっていることと無関係ではないであろう。高IQ児がアグレッシブな作品を作ることが少ないのは、彼らが内的に安定している証拠であるかも知れないし、発達的にみて既にそういう域を脱しているためかも知れない。高IQ児の箱庭は全体として平和で、落ちついた、いかにも優等生らしい作品が大半であった。

性差に関しては、「少女は内的空間を強調し、少年は外的空間を強調する<sup>1)</sup>」といわれるように、子ども群一般に、女子にテーマaが多くなっている。高IQ児のうちでもその差は顕著で、X<sup>2</sup>検定の結果、5%水準で男女間に有意な差が認められた。

一方、成人においては特に性差は認められず、男子に

も「庭」のテーマがかなりあって、成人の一つの傾向を示している。

## Ⅲ. カテゴリーの作成と適用

### (1) カテゴリー作成にあたって

前報のごとく、われわれは、さきに岡田<sup>11)</sup>の考案した6種の作品タイプに、普通児と精薄児の作品を分類した。その際、精薄児群にこの6種のいずれにも分類できない作品が多かったため、われわれの資料をもとに、あらたに分類基準を考え、再び分類を試みることにしたのである。さらに、セラピストがクライアントの作った個々の箱庭をみて、治療関係の進行状態を考える基準としても役立つような、一定のステップをもったカテゴリーを作りたいと考えた。

作成にあたっては、山本・越智<sup>12)</sup>の生命カスケールを参照し、作られた箱庭から制作者の感情、主体性を見出そうとする態度で臨み、そのあらわれ方がどの程度か、またそれを見る者がどのようにその作品に共感し、かわっていきけるかに焦点をあわせた。

カテゴリーAは、われわれが実験的に作品を集めているうちに、治療関係の流れの中にはない作品群として出会う特徴的なものを参考にした。即ち、それらは単に「作品」であって、制作者自身の内的世界が見るものに働きかけてこない。おそらく臨床心理学的には問題のない人の作品であるか、あるいは何らかの理由で、極度に防衛が働いたための表現であろう。その中で、よく統合されているものをA-I、構成が貧弱なものをA-IIとした。

カテゴリーBは主として精薄児の作品のうち了解不能な表現をみて考えたものである。また、カテゴリーC、D、Eはセラピストとの関係が深まるにつれてみられるクライアントの動きに準じたもので、その度合によって

第6表 テーマ

テーマ	高IQ児	普通学級児	精薄児	成人	高IQ男児	高IQ女児	成人男子	成人女子
① 家および家の庭 遊園地、公園	5 (14.29%)	24 (30.00%)	3 (10.71%)	17 (42.50%)	1 (4.17%)	4 (36.37%)	7 (35.00%)	10 (50.00%)
② 町村	9 (25.72%)	17 (21.25%)	6 (21.43%)	5 (12.50%)	7 (29.17%)	2 (18.18%)	2 (10.00%)	3 (15.00%)
③ 郊外の風景 牧場、農場	16 (45.71%)	14 (17.5%)	1 (3.57%)	8 (20.00%)	13 (54.17%)	3 (27.27%)	5 (25.00%)	3 (15.00%)
④ 自然 (ジャングル、草原)	2 (5.71%)	6 (7.50%)	0 (0%)	3 (7.50%)	2 (8.32%)	0 (0%)	2 (10.00%)	1 (5.00%)
⑤ おとぎの国 つと、人びと	2 (5.71%)	1 (1.25%)	1 (3.57%)	5 (12.50%)	0 (0%)	2 (18.18%)	3 (15.00%)	2 (10.00%)
⑥ 戦い	1 (2.86%)	10 (12.50%)	2 (7.14%)	0 (0%)	1 (4.17%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
⑦ 動物園 自然動物園	0 (0%)	4 (5.00%)	0 (0%)	2 (5.00%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (5.00%)	1 (5.00%)
⑧ その他	0 (0%)	4 (5.00%)	15 (53.57%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)

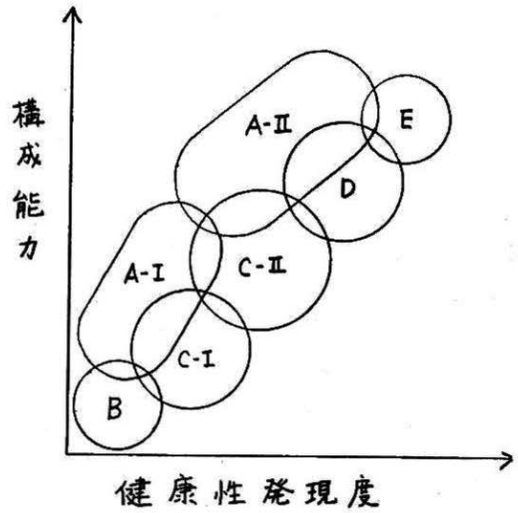
Cをさらに二つに分割した。カテゴリーEはすべてが統合され、制作者の健康性が生き生きと箱庭の中に発現されており、見る者に深い感動を与えるものである。構成能力という点では、治療中のクライアントは最終段階でもEに達せず、D段階にとどまるケースも多いであろう。高IQ児の作品の中には、一回限りの制作であるにもかかわらず、このEに属すると思われるものがかなりあった。

第7表 箱庭作品評定カテゴリー

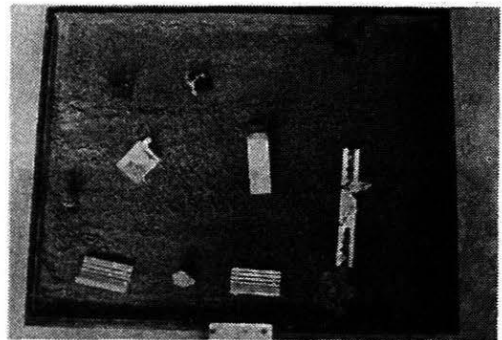
カテゴリー	表	現
A	A-I	ひとつの風景、観念的な表現としかみえない。作者の感情、動き、人柄など訴えてくるものが少なく、作者とは切り離された、単なるまとまった作品という感じが強い。 (概念的「作品」型、無表情型)
	A-II	表現は巧みで統合度の高い優秀な作品
B		全体的にみて固い、貧しい、空虚な、流動していない、あるいは雑然としたなどの感じが抱かれ、なにか違和感がある。作者の意図がはっきりとつかめない。 (異様、不可解型、共感不可能型)
C	C-I	表現は観念的、傍観的、あるいは雑然とした感じも強いが見る者がそれを主体的なかわりとして、また作者の欲求からくる動きとして捕えられ可能性を認めず、共感するまでにはいかない。 (感情表出開始型)
	C-II	作者の感情、性質、考えなどが作品の小さい部分に顔をのぞかせ、何かが動きはじめている。しかしそれらが一体化して作者の人間全体をあらわしているようにはみえない。いまひとつ見る者の心を強く打つというところがなく、物足りないと感じる。 (感情表出進行型)
D		かなり自然に自分の感情を出し、見る者に何かを訴えている。統合されていない面、固さなどは残っているが作者の主体性の芽生えが感じられる。 (主体性萌芽型)
E		自然に生き生きと自分の感じとっている世界を表現している。独創的な作品で現実との余裕をもった豊かなかわりが感じられ、作者の健康性があらわれている。 (健康性発現型)

なお、われわれはこのカテゴリーを図式化すると次のようになると考えている。

初期の作品がAあるいはBに categorize されたとしても、箱庭療法により治療の接近が続けた場合は、次第に、より共感できる方へと移行することが予想される。



第2図



第3図 カテゴリーA-Iの作品例



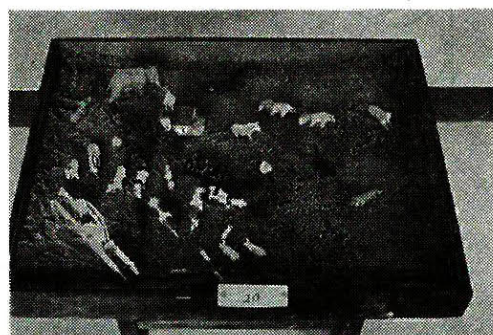
第4図 カテゴリーA-IIの作品例

さて、第8表は、箱庭を制作中の態度を評定するカテゴリーとして作成したものである。できあがった箱庭をみただけでは誤解が生じる場合があると思われるので、制作中の態度がいかなるものであったかを評定し、作品





第5図 カテゴリーBの作品例



第6図 カテゴリーC-Iの作品例



第7図 カテゴリーC-IIの作品例



第8図 カテゴリーDの作品例



第9図 カテゴリーEの作品例

#### 第8表 箱庭制作態度評定カテゴリー

- a. ほとんど抵抗も示さず、すぐとりかかり、次々と作っていく、素直な態度で楽しそうに制作する。  
手早く置いていき、作りかえ、置きかえをほとんどしない、制作時間も平均的。  
(標準型)
- b. まわりのことなど、ほとんど気にかけず作ることに没頭する。  
玩具も、種類、数ともにふんだんに使い、時のたつのも忘れて熱中する。非常に意欲的。  
(熱中型)
- c. 作りかえ、置きかえが極めて多く、最終作品にとりかかるまでに時間がかかる。玩具の吟味、選択に非常に時間をかけ、少しずつ考え考え作っていく。一見苦しそうに見えることもある。  
(試行錯誤、吟味型)
- d. 箱庭を作ることに強い興味を示さず、制作意欲がそれほど感じられない。つまらなそうな態度。  
(消極型)
- e. 立ち会っている人の目を極めて気にかけ、たびたび様子をうかがう。見られているのがはずかしい、という気持ちが強く、制作にうちこめない。  
(神経過敏型)

評定の際の参考にしたいと考えた。このカテゴリー作成にあたっては、加藤<sup>5)</sup>の研究を参考にした。

#### (2) カテゴリーの適用

箱庭評定カテゴリーにしたがって、われわれ2名が総計143名(高IQ児35名、普通学級児40名、精薄児28名、成人40名)の箱庭作品のスライドをみて評定をおこなった。評定者間の一致率は79.7%であった。制作態度評定は、テスターとして立ち会った者が単独に評定し

た。この二つの評定結果を組み合わせたものが第9表である。この表では2人の評定が一致した作品のみをとりあげた。

次に、箱庭療法を継続してうけたクライアントの最終の箱庭作品12例について、作品評定カテゴリーを用いて評定をおこなってみた。

（3）各群の特徴について

高IQ児群は、カテゴリーBを除く全体に分布しているが、中でもカテゴリーDおよびEに属するものが多い。これは普通学級児、精薄児群に比し、1%水準で有意な差が認められた。またA-Iに属したのも比較的多く、総じて統合度の高い作品であった。健康性があふれ、子どもらしい奔放さを備えた豊かな作品が多数を占めたことは、高知能に恵まれた彼らの多くが、精神的に

第9表 評 定 結 果

態度 作品	a	b	c	d	e
A-I	○	×			
A-II	○ ○ ○	×	○		
B					
C-I	○ ○		○ ○		
C-II	○ ○ ○			○	
D	○ ○ ○ ○	×	○		
E	○ ○ ○	○ ○			

高IQ児

態度 作品	a	b	c	d	e
A-I	×				
A-II	○				
B				○	
C-I	○ ×				
C-II	○ ○ ○ ○ ○ ○	○	○		
D	○ ○ ○ ○				
E	×				

普通学級児

態度 作品	a	b	c	d	e
A-I	○				
A-II					
B	○ ○ ○ ○ ○	○ ×			
C-I	○ ○ ○ ○ ○ ○				
C-II					
D					
E	×				

精薄児

態度 作品	a	b	c	d	e
A-I	×			○	
A-II	○ ○ ○ ○ ○ ○	×	○ ○ ○		
B					
C-I	×			○	
C-II	○ ○ ○				
D	○ ○ ○	×			
E	○ ○	○ ○ ○ ○	×		

成人

{ 2名の評定者の評定が一致したもののみについて  
○…男子 ×…女子



第 10 表

評定者	ケース No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
評 定 者 1		E	E	E	C-I	D	D	D	C-I	C-I	D	D	E
評 定 者 2		E	E	E	C-I	E	D	E	D	C-I	D	D	E

(この12例はいずれも京都市カウンセリングセンターの資料を借用した。いずれも小学校4, 5, 6年生の来談児である)

より安定した、豊かな状態にあることを反映しているものと考えられる。高IQ児群はまた約半数の者が箱庭の砂を自由に掘りおこし、動的な玩具材料には動きをもたせるよう工夫して使っていた。

精薄児群はBとC-Iに集中したが、これは彼らの特性をよくあらわしていると思われる。しかし彼らの中にも実にみごとな表現をするものがあることを見逃してはならない。知能テストでははかれない可能性の世界が、箱庭に生き生きと表現されることに注目したいと思う。

成人群はA-Iに評定されたものが最も多い。一般に概念的な「風景」を制作する者が多く、独創性のあるものは少なかった。一方、Eに評定された作品は、健康人の深い内的世界をよく示していた。

さて、12例の来談児群は、いずれの評定者によってもほとんどがDまたはEに評定され、カテゴリーAに評定されるものは1例もなかった。特にEに評定された作品には、なみなみならぬエネルギーが感じられた。(なお、Cに評定されたものの中には、箱庭の最終作品ではあるが、セラピィは終結しておらず、その後もカウンセリングなどが継続しておこなわれているものが含まれている。)

さらにまた、来談児群の作品には、物語的な意味づけのあるものが多いことが特徴であった。

制作態度に関しては、どの群もカテゴリーaが多く、これが一般的な箱庭に対するとり組み方であろうと思われる。傾向として、普通学級児より高IQ児、そして成人の方が態度が多様で、熱中型や吟味型が多くなっている。また女子群より男子群の方が態度は多様である。

#### Ⅳ. バウムテストとの関連

高IQ児群の描いた木は、葉や実がたくさんあるものが多かったが、中には葉も実もなく幹や枝が露出している木もみられた。彼らの60%が実を描いており、実を強調しているものも若干みられた。すでに常識も発達し、環境と自己の調整を問題なくやっていける子が多いこと、また自己に対する自信が強く、自分を誇りたい感じがよく出ている。一方、極端な左側強調が4名あり、そ

の他、抑圧されているような木を描いた者もあったが、これらは周囲との関係で何か潜在的な問題を有しているものと思われる。

高IQ児の箱庭のうち、われわれが何か問題があるとしてとり出したものが9例あるが、このうち7例がバウムテストにおいても問題を示した。また、バウムテストにおいて三次元の表現をした11名について、箱庭作品ではどのカテゴリーに属しているかを調べたところ、C-I, D, EまたはA-Iのいずれかに属しており、構成の巧みなものが多かった。

#### V. 「優秀児」の箱庭と「来談児」の箱庭

以上、いくつかの角度から知的優秀児(高IQ児)の箱庭の特徴を追求めてきたが、ここでそれらを総合して考察してみたい。

「優秀児」としてわれわれがとりあげたのは、知的に優れているという子どもたちであったが、箱庭表現をとおしてみた彼らの多くは、やはり情緒的にも安定し、性格においても優秀性を示している。

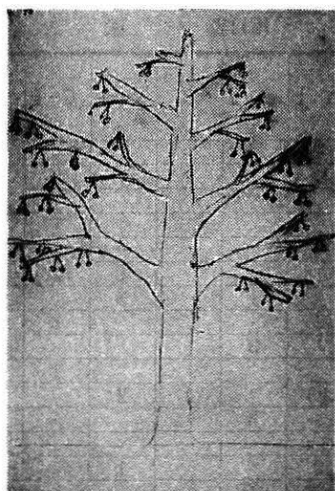
彼らの作品のうち、典型的な「優秀児」の箱庭と思われるものは、おおよそ二つの方向に分けられる。

その一つは、カテゴリーA-Iに属するような箱庭である。造形的な才能を有する児童であれば、容易にA-Iタイプの作品を作りうるのであろう。問題を感じさせぬ、したがって主として構成が巧みだというような感想を抱かれる、いわゆる優等生タイプの作品である。こういう箱庭を作る子どもたちは、日常においても、与えられた課題は、器用に、そつなくやりとげていくのであろうと思われる。

もう一つは、カテゴリーD、あるいはEに属する箱庭である。

躍動感あふれ、活気にみちた「街」、あるいはそこに登場する人々や動物から、生き生きした生命力が伝わってくる「世界」など、統合された内面世界の豊かな象徴化は、見る者の深い感動を呼ぶ。こういう箱庭表現にみられる制作者の「力」こそ、日々の生活におけるより積極的な、変革と創造のエネルギーにつながるものではない

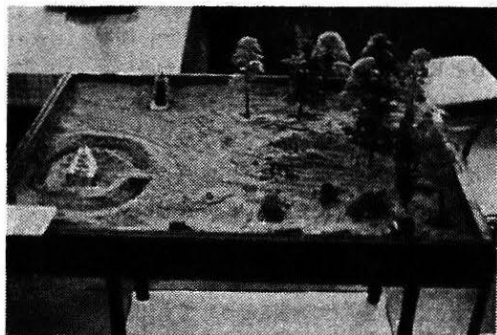
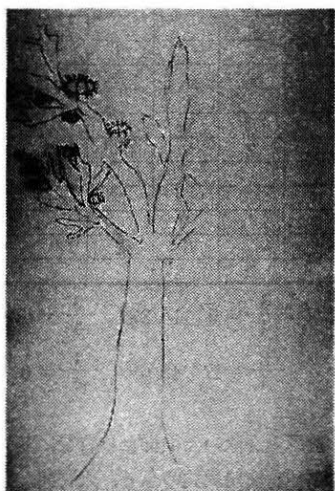




第10図 バウムテストとの関連(1)

バウムテスト……まっすぐに伸びる幹、実がたくさんなっている枝には、葉がまったくみられない。これはこの子どもの自信の強さを示しているのであろう。また、ふつう子どもは地平線をかかないものであるが、このおだやかな地平線は、この子の気持の安定をあらわしているようである。

箱 庭……（作品評定E，態度評定b）1時間以上をかけ、たねねんに、しかも楽しそうに作った。左手に Self を象徴するような深いしげみの中の社がある。よく統合された、優秀児の代表例。



第11図 バウムテストとの関連(2)

バウムテスト……左寄りにかいて、しかも左ばかりを描くという、著しい左側強調がみられる。筆圧弱く、点線の部分もみられる。イガグリの実がかかれて、いかにも自分のからに閉じこもりがちな傾向をよく示している。

箱 庭……（作品評定C—I，態度評定C）左側に、お堀にかこまれたお城がぼつんとあるのが印象的である。全体に「孤独」な感じがただよう、さびしい作品である。バウムテスト、箱庭両方に問題が感じられる一例。

いか。「優秀児」の作品としてわれわれが期待していたものは、まさにこのタイプであった。

「可能性」としての優秀児が、有為な優秀人に成長す

るためには、より多く、前者から後者のタイプへと箱庭表現が転化していくことが望ましいのではないかとわれわれは考える。

終結時にみられる、クライアントの箱庭もまた、この後者のタイプに近いものである。継続して、しかも集中的に自己と取り組んでいるだけに、彼らの作品は、一層ダイナミックであり、非常なエネルギーを有している。

来談児の箱庭は、他の被験者の作品に比し、見る者に多くを語りかける傾向がある。これは何よりも、セラピストとのかかわり合いの中で幾度も作ってきた故であろう。セラピストが常に存在するということは、箱庭表現の意味を、より理解しやすいものにし、同時に、箱庭の中に独得の生命力を育てるように思われる。

来談児は、当初混沌としている心的エネルギーを、セスピストに見守られながら、徐々に具体的な表現をとおして統合していく。

ここでとりあげた「優秀児」たちは、セラピストの支えなくしてなお、みごとに統合されたエネルギーの一つのあり方をわれわれに示しているのである。

## VI 今後の問題

本研究においてわれわれが作成を試みた箱庭評定カテゴリーについて、さらに2名（いずれもセラピスト）の評定者を追加し、高IQ児群（35名）のスライドを対象に評定をおこない、その一致度、問題点を検討してみた。第11表がそれであるが、連続したカテゴリー、即ちC-IとD、DとEなどに評定が分かれたものが多い。また、A-IIとDまたはEに分かれている評定もいくつかみられるが、これは新しく加わった2名がセラピ経験の豊かなセラピストで、比較的Aに評定することが少なかったためである。評定の散らばりの多い作品には、われわれがIV項で、箱庭の問題群としてとりあげたものが多く含まれているが、これらは実際に箱庭の制作に立ち会っていた者和其他の評定者との間にどうしても印象の違いが生じるので判定が困難であろうと思われるものであった。

いずれにしても、この結果はまだ満足すべきものではないので、今後カテゴリーの概念規定をさらに明確にし、信頼性の高いカテゴリーに改案していきたいと思っている。

## 要 約

知的優秀児（高IQ児）35名のサンドプレイにおける表現の諸相を分析し、普通学級児、精神薄弱児、成人などの箱庭や、さらに来談した問題児の最終の箱庭作品と比較した。また、作品を評定するカテゴリーを作成し、各群の評定を試みた。結果は以下のとおりである。

（1）高IQ児群は、箱庭の制作時間が他のどの群よりも有意に長く（約33分）、使用玩具の数および種類につ

第11表 一 致 数

カテゴリー 作品番号	A-I	A-II	B	C-I	C-II	D	E
1					4		
2	2		1	1			
3							4
4			1		1	2	
5					2	2	
6				1	2	1	
7		1		3			
8					3	1	
9		3					1
10					1	1	2
11			1	2		1	
12		3			1		
13						1	3
14	2			1		1	
15		1					3
16						3	1
17		3					1
18					3	1	
19					2	1	1
20				1		3	
21						2	2
22		1				3	
23		2				1	1
24						4	
25						1	3
26				2			2
27		2		2			
28						4	
29			1	2	1		
30		2					2
31						2	2
32						1	3
33							4
34	1		1	2			
35		2				1	1

$$\begin{aligned} \text{一致率} \quad \frac{4}{4} &= 5 \quad 14.3\% \quad \frac{3}{4} = 13 \quad 37.1\% \\ \frac{2}{4} &= 17 \quad 48.6\% \quad \frac{1}{4} = 0 \quad 0\% \end{aligned}$$

いても、精薄児を除いた他群より有意に多く使った（約60、4種類）。使用玩具のうち、人間類、動物類、乗物類の使用量の割合は、普通学級児＞高IQ児＞成人の順になり、植物類については、成人＞高IQ児＞普通学級児となっている。

（2）高IQ児群および男子群のテーマは、郊外の風景、牧場、街といった広いスペースのものが多のに比し、成人群および女子群では家の庭、公園などの比較的狭いスペースのものが多く、有意な差があった。また高IQ児群のテーマは、おだやかな平和的なものが多く、戦いのテーマは極めて少なかった。

（3）カテゴリーによる評定の結果では、高IQ児群お

よび来談児群の箱庭は、カテゴリーDまたはEに評定されるものが多く、いずれも健康性のあふれた、統合度の高い作品であった。

はじめてサンドプレイに臨んだにもかかわらず、高IQ児群は独創的で豊かな作品を作り、精神的にも安定した児童であることを示した者が多かった。

来談児群の最終の作品には非常なエネルギーが感じられ、一層ダイナミックで、意欲にあふれた作品が多かった。彼らの箱庭には物語りの意味づけがあるのが特徴的であった。

終りに、お忙しい中種々御指導戴いた、京都教育大学一谷彊先生、京都市カウンセリングセンター西村洲衛男先生（現在名古屋市立大学）、御校閲戴いた山松質文教授に深く感謝いたします。

#### 文 献

- 1) Erikson, E.H. : Identity—Youth and Crisis, W. W Norton & Company, Inc, New York, (1968) (邦訳. 岩瀬庸理訳：主体性〔青年と危機〕, 北望社, 1970)
- 2) 岩堂美智子, 奈比川美保子：箱庭療法に関する基礎的研究, 大阪市立大学家政学部紀要第18巻, (1970)
- 3) Jung, C.G. : Psychologia und Erziehung Rascher Verlag, Zürich, (1946) (邦訳. 西丸四方訳

: 人間心理と教育, ユング著作集5, 日本教文社, 1970)

- 4) Kalf, D. : The archetype as a healing factor, Psychologia, 9, 177—184, (1966)
- 5) 加藤実：SCTにおける無応答の分析, 臨床心理学研究, vol. 6, No1, 3—10 (1967)
- 6) 河合隼雄：ユング心理学入門, 培風館, (1967)
- 7) 河合隼雄：箱庭療法入門, 誠信書房, (1969)
- 8) Koch, K. : Der Baumtest : Der Baumzeichenversuch als Psychodiagnostisches Hilfsmittel, Hans Huber, Bern. U. Stuttgart, (1949)  
(邦訳. 林勝造, 国吉政一, 一谷彊訳：バウム・テスト——樹木画による人格診断法——, 日本文化科学社, 1970)
- 9) Lowenfeld, M. : The World Pictures of children, Brit. J. Med. Psychol., 18 : 65—101, (1939)
- 10) 森重敏：優秀児の心理, 日本文化科学社, (1971)
- 11) 岡田康伸：Sand play Technique に関する実験的研究, ——SD法による分析を中心として——臨床心理学研究, vol. 8, No. 3, 151—163 (1969)
- 12) 山本和郎, 越智浩二郎：心理治療過程の現象学的研究——治療関係スケールと生命力スケールの構成と適用——臨床心理, vol. 2, No3, 3—23, (1963)

#### Summary

The purpose of this study is to analyse the Sand Play pictures of 35 gifted children (above 135 IQ), and to compare the pictures of 12 problem children which were produced at the last therapy session with ones of the gifted children.

The findings derived from the analysis of the children's pictures were as follows :

- (1) Many pictures of the gifted children and the problem children belonged to some positive categories and they were all healthy and highly integrated pictures.
- (2) For the gifted children it was the first experience to try Sand Play, they showed that they were stable in their personality.

We were impressed of the great psychic energy with the pictures of the problem children, and most of them symbolized some significant thematic stories. Generally the latter pictures seemed more dynamic and more vigorous than the former.